論文審査の結果の要旨

氏名：望　月　　晋
専攻分野の名称：博士（医学）
論文題名：Impact of Postoperative Complications on Long-Term Survival of Hepatocellular Carcinoma Patients After Liver Resection
（肝細胞癌患者における肝切除後の予後に対する術後合併症の影響）

審査委員：（主 査）　教授　山　下　裕　玄

（副 査）　教授　岡　田　真　広　　教授　櫻　井　裕　幸

教授　三　木　敏　生

肝細胞癌に対する治療法は肝障害度や腫瘍径、腫瘍個数などに応じて選択されるが最も確実な治療法は外科的切除である。術後合併症の発生は無再発生存期間、全生存期間対する予後不良因子であることが多くの癌腫において報告されている。肝細胞癌に対する既報はあるものの、合併症の有無に焦点があてられたものが多く、具体的にどの合併症の発生が予後に関連するのか不明な点が多い。
望月氏は 2000 年から 2018 年に開腹肝切除が施行された初発の肝細胞癌患者 1251 例を対象に、術後合併症の詳細を調査し、各合併症の発生有無毎に無再発生存期間と全生存率期間の関係を検討した。術後合併症として胸水貯留、ドレーン感染、創感染、胆汁瘻、術後輸血、腹水貯留、無気肺、腹腔内出血、腹腔内膿瘍、肺炎、イレウス、門脈血栓が確認されている。当該期間において、輸血についてはヘモグロビン値が 7 g/dL 以下をトリガー値として開始する方針がとられていた。
望月氏は術後合併症として Clavien-Dindo 分類を用い、Grade I 以上を合併症ありとして解析した。
その結果、無再発生存期間と相関したのは術後輸血及び胸水貯留、全生存期間と相関したのは術後輸血、腹水貯留及び胸水貯留であった。
一般的には、臨床的に問題となるのは Grade II 以上の合併症で、Grade IIIa 以上を有意として検討されることも少なくない。多数例のデータを用いた検討であることから、術後合併症の cutoff を Grade II として追加検討した。無再発生存期間、全生存期間と相関したのは術後輸血及び胸水貯留であり、Grade I を cutoff とした場合とほぼ同様の結果であった。
外科領域において術後合併症の軽減は短期成績だけでなく oncological な長期成績にも影響する。本研究は肝細胞癌に対する肝切除後に、予後に関連する合併症を具体的に示しており、長期的な成績向上に向けた情報として臨床的有用性が高い。

よって本論文は,博士（医学）の学位を授与されるのに値するものと認める。

以　　上

令和５年１月２５日